

令和7年度第1回 京都市図書館協議会摘録

● 開催日時

・令和7年11月28日(金)14:00～16:00

● 開催場所

・京都市生涯学習総合センター(京都アスニー) 3階 1 第4研修室

● 出席委員(10名中8名出席)

- ・岩崎 れい 委員
- ・岡本 卓也 委員
- ・後藤 由美子 委員
- ・佐々木 美緒 委員
- ・古澤 奈央子 委員
- ・道又 隆弘 委員
- ・森口 光輔 委員
- ・山崎 信夫 委員

● 傍聴者

・3名

1 開会

- (1) 出席委員紹介
- (2) 事務局紹介
- (3) 開会のあいさつ

開会の挨拶

図書館というものは歴史の古いものであることは皆さんご承知のとおりであるが、私がつくづく思うのは、図書館は極めて日常的な機能を有しているということ。1000年の歴史と日々の日常の一刻というのは相反するものであるが、両者に跨って機能している。

2, 3日前に、新聞で80歳ぐらいの女性の投稿を読んだ。「私の思い出」として、亡くなったご主人が本箱を買ってくれた、とても嬉しかった、と。では、その本箱にはどんな本を入れたのだろうと、読者としては当然そう思う。ところが、その女性は本箱に日記帳、家計簿をそこに納めた、とある。本箱を買ってもらったところまで読むと「どんな本箱だったのだろう」と思うが、彼女は「日記帳」「家計簿」といった日常で使うものを宝物として納めていた。本を読むとはそういうことかと、私は強く思った。本というものは、そのようにして、心とか身体とかそういうものを預けてきた、そういうものを有するのが本であり読書であると思う。

図書館協議会は法律に基づく協議会であり、本日私達は義務として協議会を開催するので、皆さんのご意見を承りたい。

2 会長・副会長の選出

会長に岩崎委員を選出、副会長に後藤委員を選出

3 協議事項

(1) 令和7年度事業説明

- ① 新規予算事業の取組内容について
- ② タスクフォース企画の区 Hub×図書館について

● 協議事項「(1) 令和7年度事業説明」に関する説明

説明

令和7年度の新しい事業について説明する。かなりの情報量になるので、概要をかいつままで説明し、後ほど会長に進行頂きながら質問があれば私からお答えするという形にしたい。

資料1 図書館に関する市民意識調査

令和7年度図書館に関する意識調査ということで今年の夏に実施した。この取組は、京都市図書館の中で各館の来観者に対するアンケート調査はこれまでもあったが、郵送での全市的な市民意識調査というのは初めての取組。これからの図書館のあり方を検討していくうえで大事な資料になる。対象は満18歳以上の市民で、5000件発送し回答率は20%ほど。アンケートの回収は終了しているが現在分析中。調査結果に関しては第2回の会議で皆様に報告できればと考えている。調査内容に関しては、現在の図書館の評価についてもだが、他都市でも先進的な取組が進む状況を踏まえ、今後求められるニーズのところに重点を置いた調査となっている。アンケートの結果から見た現状や課題、今後の図書館の方向性が見出せるような分析をしていきたい。

資料2 京都市図書館に関するアンケート

実際のアンケートの内容。

資料3 市民しんぶん(2025/11/1)

市民新聞の1面に取り上げていただいた。期間限定で図書館が特別な空間に変わりますということで、ここに来られる前に中央図書館のポップアップライブラリーをご覧いただいたと思うが、期間限定の社会実験として図書館で新しい空間を創出して市民ニーズを拾い、図書館の可能性を探っていきたいと考えている。具体的な中身については次の資料4で説明する。

資料4 市長記者会見資料「POP-UP LIBRARY KYOTO & BOOKS」

これは市長が記者会見で使用された資料がベース。市民意識調査と居心地のいい空間創出事業を合わせて新しい図書館構想に向けたLIB×LABプロジェクトという形で実施。どちらの事業も調査や社会実験でどのような市民ニーズや可能性があるのかということデータをまとめていく取組。来年度以降の新しい図書館構想の策定に向けた動きにつなげていきたい。

サードプレイスプランの試行実施について

(株)Open A(オープンエー)という事業者と委託契約を締結。図書館の中で仮設空間を作り市

民や図書館の司書を集め、どのような可能性があるのか、どのようなニーズがあるのかということ積み重ねていく。中央図書館、右京中央図書館、左京図書館の3館で実施。左京図書館は10月から開始しており、現在は中央図書館で開催。来年1月から右京中央図書館で開催。

左京図書館について

左京図書館は10月18日から11月21日まで実施。

テーマは「BREAK & BOOKS」。コーヒーと本を楽しむひとときということで、コーヒーと本という相性のいい関係を楽しんでいただく企画。全国的な事例でも、図書館の中でコーヒーが飲めたり、本屋でカフェが併設されて購入した本を読みながらコーヒーが飲める空間が作られている。それを図書館でやってみようという企画。それに合わせてコーヒーの淹れ方ワークショップも実施。また、図書館には基本的におもちゃは入れていないが、ボードゲームパーティーを社会実験として実施。子どもがおもちゃで遊びながら本とどう関わるのかというところを見てみた。コーヒーも大好評、ボードゲームも子どもが前のめりで楽しむような場面があり非常に好評。アンケートを行ったが、こういうイベントがあると図書館をもっと使いたいという声がたくさんあった。一方で、図書館には静けさを求めているという声やイベントはよそでやってもいいのではという声もあった。そのような声もあるということを踏まえながら、今後検証を深めていきたい。

中央図書館について

テーマは「FIND & BOOKS」。本とくつろぐ新たな発見ということで、来年の1月16日まで開催。11月22日の土曜日には、ピロティにキッチンカーを入れてイベント的な盛り上がりを作ってみようということで実施。ピロティの活用は今までなかったが、初めてやってみて、いろいろと賑わいが生まれたと思う。また、近隣マップを作るというイベントや物々交換の本棚という取組も実施。もうひとつが現在実施中だが、中高生限定の自習空間の設置。京都市の図書館は延床面積が狭く閲覧席が十分に取れていないことから自習を可にすると自習の人が増えて座って本が読めないという声もあることから自習を不可にしているが、市民から図書館で勉強させてほしいという声がたくさんあるので、図書館で自習できる空間を何とかできないかという取組で実施している。

右京中央図書館について

テーマは「MEET & BOOKS」。本と出会う交流空間ということで、閲覧スペースの空間をうまく活用して実施。1月17日、図書館が入居する4階のスペースを使ってZINE(ジン)(=自分の思いや表現を自由にまとめた個人制作の小冊子)の制作ワークショップを実施予定。また、図書館内で事業者がコーヒーを販売。図書館とコーヒーという取組を続けながら、コミュニケーションライブラリーの実施として、本と人の繋がり、人と人の繋がりを大事にしたいということから、大きな掲示板を設置しそこにコメントや自分のお勧め本や近況とかいろいろなこと書き込んでもらいコミュニケーションを高めたい。これは、SFC 未来構想キャンプという慶応大学の湘南藤沢キャンパスで実施している取組を松井市長がSFCにおられたこともあって京都でやってみよう誘致されて、全国から集まった高校生と慶応の研究生が一緒になって、市役所の庁舎と右京中央図書館の公共空間の新しい活用を考えようという研究をしてくれた。そこで出された、図書館の中に大きなホワイトボードを立ててそこで本の感想やお勧め本を書いていくことで繋がりができるのでは、という提案

を受けての取組。

情報発信について

情報発信のフィードバックということで、特設サイトも用意しているが、POP-UP LIBRARY のインスタグラムも立ち上げている。図書館の取組の情報発信の形にしていけたらと思っているので、ぜひインスタグラムもご覧いただきたい。

資料5 「& BOOKS」チラシ

資料6 企画書

(株)Open A(オープンエー)の企画はイベント感満載の取組が多いが取組の趣旨としては、図書館の新しい可能性を見つけたり図書館のあり方を検討していこうというものなので、真面目に向き合う企画も入れたいということで、このポップアップライブラリーの空間でこれからの図書館を考えるワークショップを行う企画を立ち上げている。12月6日の土曜日、中央図書館のポップアップの空間を使ってこれからの図書館は何ができるのかということ、楽しい雰囲気のできる場にしたいと思っている。

資料7 報道発表資料

「みんなの本棚」参加者募集ということで、先ほど説明した右京中央図書館で1月17日から始まる企画のホワイトボードの横に、今大人気のシェア型本屋さんのような本棚を立てて、そこに自分の好きな選書で、自分の好きな飾り付けで、自分だけの本棚を作ってもらおうもの。ホワイトボードの活用も広がり、本棚を通じた人と人とのコミュニケーションや繋がりが生まれるのではと考えている。12月1日から募集を開始する。基本的には、選書は図書館の本でしてもらい、本は借りられる状態にして、自分の並べた本が借りられていくという繋がりを楽しんでもらいたいと思っている。

資料8 区Hub 連携事業

図書館の所管は教育委員会で、区役所の所管は文化市民局で、役所の中で所管が分かれています。市民にとってはどちらも身近な施設にも関わらず連携が薄いという課題があった。それを繋げてみたらいろんな取組が生まれるのではということで、今進めているところ。その取組として9月13日に左京図書館ファンミーティングを実施した。民間企業の販売促進において「ファンベース」という考え方があり、商品をいろいろな人に紹介するのではなくその商品を愛してくださってる方(＝ファン)にどんどん紹介して掘り下げていくという考え方。図書館においてもそういう考え方はできないかという庁内議論があり、左京区役所と連携しながら、左京図書館のコアなファンを集めてファンミーティングを実施した。ライブペンディングやお酒アンドブックス、小学生による一箱本棚を作れないかなどいろいろなアイデアが出てきた。本日の資料にはないが、左京区には留学生がたくさんいるといった地域性を活かして、留学生の方が読み聞かせをしてくれないかという声があり、実際に、留学生とかけ合った結果、「世界のおはなし&BOOKS」といった企画が実現した。アメリカ、インド、中国、オーストリア、オーストラリア、韓国の留学生が来てくれて、全員日本語を喋れるので、母国の絵本を母国語で読みながら、日本語でも解説し、その後その国の文化や朝ごはんは何を食べるのか、どんな遊びをしているのかといった各国の生活文化を話してもらい、会場が異文化交流で盛り上がる企画になった。今後もこうした取組を進めていきたい。

岩倉図書館について

岩倉図書館にはウッドデッキテラスがあるのでこれを活用して何ができるかというワークショップ。ウッドデッキの横に花壇を植えたりとか、ここでもホワイトボードを設置して意見やコミュニケーションが繋がるのではないかとかといった意見も出た。近くにある洛北中学校の生徒も参加してくれて、自習させてほしいという声もあった。中学生に再度確認すると、今後もこういう企画に関わりたいということで、中学生が使って楽しくなるような図書館のあり方を検討する会議を設置し、検討していきたい。

西京図書館について

西京区役所は最近建て替えられた関係で、西京区役所の中でコーヒーを出店する事業者がおり、その事業者との連携で、図書館の中でもコーヒー出してみようという企画をされた。また、隣接する公園で本を持ち出し。コーヒーと本を楽しめるようなキャンプイベントも実施した。

洛西支所との連携について

ここは市内で唯一ワンフロアで図書館と区役所支所の庁舎が繋がっており、この空間をうまく活用してキャンプのイベントを実施。図書館と支所のどちらでもテントを立て、図書館の司書が洛西支所に出向いて読み聞かせをするなど、いろいろな展開が生まれた。

吉祥院図書館について

吉祥院図書館は良い雰囲気の手頃な庭があり、この庭を活用してイベントを実施。モバイル屋台を出しながら近くの子ども食堂のアンドハピネスさんと連携して、コーヒーやクッキーも販売してもらいながら、楽しめるようなイベントを実施した。

東山図書館について

東山図書館は小さく館内で大規模なイベントを行うのは難しいが、東山区役所に大きな展示場があるため、ここで京大の模型部と3者で連携しながら、京大模型部がジオラマで模型を走らせて、その周りで図書館は模型や鉄道に関する資料を並べて、コーヒーも飲める空間を作ろうというイベントを企画。この事業は東山図書館と東山区役所との連携になるが、12月13日に実施する予定。

このように、いろいろな取組が進んでいる状況ということで、ご説明をさせて頂いた。

● 協議事項「(1) 令和7年度事業説明」に関する意見

意見

図書館で新しいいろいろな試みがされていて、良いなと思った。

私自身、大学生と高校生の子どもがいて、小学校、中学校、高校でもPTA会長をしていたが、子どもから図書館で自習がしたいという声をよく聞く。先ほどの説明のアンケートの結果でも自習がしたいとあった。この会議の前に図書館を見せて頂いたときも付箋で自習がしたいと書いてあったりした。あと、小さなお子さんがいるお母さんから、子どもが声を出せる時間帯や機会がほしいという声がよく聞かれる。なかなかすぐには子どもが声を出せる時間帯を作ることは難しいかもしれないが、新しいイベントで今まで図書館に馴染みがなかった人達も図書館は参加しやすい行きやすい

というイメージができたと思うので、そういう世代の方に来てもらえるイベントを実施して頂いて、またゆくゆくは自習やお子さんが思い切り過ごせる時間帯のある居場所になれば、さらに図書館に来てくださる方が増えると思った。

意見

個人的に知りたいのは、なぜ図書館で自習なのかということ。1970年代ぐらいに席貸し問題とあって、閲覧席数の制限もあって多くの図書館が自習だけの利用は不可とした。しかし時代は変わっているので、どういうところからニーズが発生しているのかを把握したうえで自習の席を提供することも考えられるのではないかな。

赤ちゃんの声を出していい時間帯の提供は左京図書館でやっていたと思う。午前中の決まった時間帯であつたらしく、保育園にいく家庭が多いなかで実態に合わないという話を聞いた。本当は、時間帯を決めるのではなくいつ来ても良いとすべきだが。

意見

仕事で東山区に関わる事が多く東山図書館でもいろいろやらせて頂いている。膨大な量のイベントなどを実施していてすごいなと改めて思う一方で、それぞれの区の図書館でもいろいろなことを実施していて大変とも感じた。先ほど議題にあがっていた「騒ぐ問題」に思うところがある。今、東山図書館と「騒げる図書館プロジェクト」をやっていて、騒げるときもあってもいいよね、ということのをどれだけイメージ付けができるか、まさにチャレンジとしてやらせて頂いている。ボードゲームやキッズ用品の交換会を合わせた企画を1日でなく2か月に1回くらいで実施。そのときは全力で騒ぐ。図書館の方から、図書館に小さいお子さんと来られた方が「すいません、騒いですいません」と言って5～10分で帰ってしまうのを見ると聞いた。それは健全な社会ではないと思う。そのため、その企画を当時の館長に提案し、了承頂き一緒に実施することになった。図書館にとってもメリットがあった。騒ぐことによって賑やかになったり、キッズ用品やボードゲームに食いついた新しい層が図書館の存在を知り新規顧客になったり、図書館にこういう機能が加わって面白いねという雰囲気ができたりした。

今後、図書館は価値のリノベーションのようなことをやっていかないといけない。本を貸す、読んでもらうだけの場所ではなく、生活の一部の場所のように、図書館の価値や意義をシフトチェンジしていかないと取り残されていく。そういうところに価値の変容を組み込んで、騒いでもいいよね、とになっていくことも大事。

意見

私が子育てをしている頃は、騒いで怒られるのではと子どもを図書館に連れて行きにくかった。しかし、今はそんなことはなく、京都市として赤ちゃんを歓迎する取組もしている。

図書館は学びを支える大事な社会教育施設であり、人が来てこそその施設。子どもたちが来つつ、いろいろな本を貸してもらえ、相談にもものってもらえ、資料を探しに行けば丁寧に対応してくれる、図書館にいる司書さんの働きもとても大事。その辺りをしっかりしたうえで、イベントをときどき実施するといったと思う。

意見

石川県の県立図書館に行った。建物自体素晴らしいが、内部の設計・運営が非常に考えられていて、いろいろな人に向けられたチャンネルを作っていくというアイデアと熱意が感じられた。これは、建替の場合に可能なのであって、京都市の図書館をどうしていくのがいいか考えると、規模は小さく老朽化も進んでいるが、館数が多く身近にあるのは利点のひとつ。そういう意味では、実はこんないいところがあるとソフト面でいえるような持ち味を作っていけたら素晴らしいなと思った。

事務局の説明を聞きいろいろな取組を知って新鮮だったし、広がっていけばいいと思う。半面、学びを支えるということが大事なので、子どもの貧困がいわれているなかで、家に本がない、読書の習慣がないというような子どもたちに地域の図書館がどのように接点を作っていけるのか、考えていけたらよいと思う。イベントでいうと、子ども食堂が最近いろいろなところで実施されている。それがコミュニティ、交流空間になっているという意味では、年に何回かでも、図書館で子ども食堂を実施して接点をつくれればいいなと思う。

意見

図書館の本来の機能は利用者の学びを支えることなので、そこをおさえながらの変革になってくるかと思う。

意見

図書館においていろいろな取組を実施していることに感心した。ただ、課題と解決すべきゴールというものが少し散漫になっている印象。何が課題であって今このようなイベントを実施しているのか、どうなれば成功なのか、少しわからないところがある。事業背景として、十分なスペースがなく自習室もないというような空間的な問題。利用者の固定化、利用世代の偏り、いろいろ課題がある。それらを解決するために、限られた空間と時間、時間は一日の時間だけでなく期間としての時間をどうしてか、いろいろなことを展開していくしかない。一番の課題は、学びを支えるということ。誰に学んでほしいのかを、夏休み期間や秋の期間とかでメリハリをつけて事業展開していかないときちんとした成果として市民にアピールできないのではないかな。例えば夏休み期間なら中高生・小学生だけ集める、それを市内の全部の図書館でやるみたいな、それぐらいやらないと注目度が上がらない。散漫になりすぎてどうしたいのかが見えない気がする。

意見

ゴールのことについて、事務局からお願いします。

回答

一番の課題は利用者の固定化と偏り。利用者が固定化しているなかで図書館で学ぶことができますよということを周知しても一部の人にしか届かない。京都市では市民の4分の1ほどしか図書館を利用していないが石川県立図書館等でいえばもっと利用者数が多く人口の半分ほどが利用しているとの情報も聞いている。新しい利用者層を図書館に呼び込むことで、もっとこんな事がしたいとか、こんな事ができるんじゃないとか、アイデアを広げていきたい。利用世代も偏り、中高生が圧倒的に弱く大学生も少ない。学校図書館もあるがスターバックスで勉強しているという。この層を図書館に呼び込めて、図書館がしっかり学べる場になることを実現していきたい。

意見

岩倉図書館のイベントに参加した。図書館に携わる人間からすると今まで出てこなかったアイデアがたくさん出てきて、無意識にハードルを下げていたと実感した。おそらく京都市図書館のなかでは課題は既に見えていると思う。今、20数%の利用登録率のなかで、とにかくいろいろなことをやってみて、きっかけを作って、いろんな人に見てもらふ、ということから本来的な図書館の機能に市民を結び付けていく、ということだと思う。いろいろなことを実施して市民に知ってもらうことはとても重要。先ほど他の委員も話されていて大事な事だと思ったのが、生活の一部、生活動線のなかに図書館が入っていくのはなかなか難しいと思うが、こういったイベントを実施することによって、ここに図書館があったんだと知ってもらうことから始めないといけない。特に学生は。そういう意味でいろいろなことをやってみるのは意義があると思う。生活動線に図書館が組み込まれたら図書館のなかで学びを重ねることに繋がる。学びは、学校教育の対象の子どもたちをイメージしがちだが、公共図書館は生涯学習の場であり、貧困を支えたり情報支援を行ったり様々な側面があり、すべての人にとっての学びの場であってほしいと思うし、そこが強みだと思う。入口として何かをやって、これから結果がでてくると思うので楽しみであるし、図書館と市民を結び付けていくことを考えていければいいと思う。

意見

先ほど POP-UP LIBRARY を見させてもらったが、本を借りたくなる雰囲気を作られていてとても良かった。小学生に紹介して、裾野が広がるといいなと思った。小学校にも図書館はあるが、机がたくさんあって狭いなかで読書している環境が課題だと思う。机を外に出して椅子だけにしたり、反対側を学習室にしたら貸出冊数が1年前より5千冊ほど増えた。環境を変えるだけでこれだけ変わる。行きたくなる図書館になるよう、環境の変化をやっていきたいと思った。

意見

いろいろなご意見、ありがとうございました。まずは基本となる考え方として、図書館は資料を提供する場であるということ、しかも生涯学習の場であることや、貧困家庭や読むことが難しい子どもたちなどすべての人にどう資料を提供していくかが欠かせないことだと思う。同時に、普段図書館に来ない人達にきっかけを作ることも大事。おしゃれであるとか、イベントを実施して面白いと思ってもらふことも大事。そのうえで気になるのが、高校生や大学生が、必要な資料がないから図書館に行かない、と言うこと。やはり資料が命と思う。資料をどのように充実していくのか。きっかけを作って来ってもらうことはいい。来てもらって楽しいと思ってもらふことはいい。その後、常時図書館を利用してもらうには、読みたいものや学びたいものがあるということが欠かせないと思う。

いろいろなことを考えて頂いているが、やはり図書館が市民の生活の一部になるにはどうすればいいか、京都市の図書館はどこに向かいたいのか、というところを明確にすべきと思うので、その辺りを事務局から説明願う。

● 協議事項「(2) これからの中央図書館・地域図書館に関する説明

説明

まず、京都市図書館の全体の概要と課題を説明する。

中央図書館が4館ある。ほとんどの他都市においては中央1館で他は分館。京都では中央機能を4館に分散している。地域図書館が15館。子そだて図書館が1館、移動図書館が1館。

老朽化の状況。京都市図書館は徒歩30分・2km圏を範囲として整備している。昭和50年から60年にかけて半数が建てられた。築40年以上経過する図書館が6館、30年以上経過が7館であり老朽化が始まっている。

図書館で従来から取り組んでいる内容。ひとつは「ブックメール」。各図書館を繋げてどの図書館からでも蔵書を予約し借りることができる。大学図書館や京都府立図書館との連携も進んでいる。

地域性を活かしたサービス。例えば右京中央図書館であれば京都大辞典コーナーがあり、京都に関する書籍が高さ2mの書架8台ほどに整えられている。

学校連携として軽トラックを改造した青い鳥号で各館を廻って選書や読み聞かせの取組を実施したり、堀川音楽高校との連携で絵本コンサートを実施している。多世代を対象ということで、ビブリオバトルや夏休みの宿題コーナーの展開などを全館通じて実施している。専門性を活かしたサービスということで、「子どもの本コンシェルジュ」を京都市の司書の中から養成。今後充実の取組ということで、まちライブラリーとの連携や書店組合との連携も進めていきたい。

課題について。10代から20代の利用が少ない。全国的にもそうであるが、京都市としても何とかしていきたい。

他の政令指定都市と比較した強みと弱み。登録率は22.7%、館数は20館で指定都市中5位。司書数は多く、その分レファレンス等が丁寧に出てくると考える。蔵書数はかなり少なく政令市中16位で、図書館の延床面積も狭く、政令市中16位。小さな図書館を多く配置することで地域密着のきめ細やかなサービスを展開出来ているのは強みだが、弱みとして、中央図書館が機能的に弱くスペースも限られているのでメディアセンターとしての機能が弱いと言える。

中央図書館の比較資料であるが、閲覧スペースも他の図書館と比べて弱く、管内での自習も不可としている状況。京都府立図書館も自習は不可だが、神戸市や大和市は自習が可能で、大和市には987席もある。

図書館マップについてだが、京都市の地図に様々な図書館を表示しており、京都市図書館のほか、大学図書館、私設図書館など、市内全体でいろいろな図書館があることも京都の強みだ。うまくネットワークで繋いで本が読める空間、学びに繋がる空間がたくさんあることを市民に発信していくことも大事である。

京都市の図書館の全体的な状況をご理解頂いたうえで、京都には大きな中央図書館がないのが課題ではあるが、逆にいうと小さい図書館がたくさんあるという特徴もある。この辺りについてご意見を頂きたいのと、先ほどからの議論の続きとして、図書館がこんな場所だったらいいなというご意見を頂きたい。

● 協議事項「(2) これからの中央図書館・地域図書館に関する意見」

意見

事務局の説明に対し質問等あれば発言願う。

ひとつは、京都市の図書館が現状どうなっているかということで、広い図書館が新たに建設されることはないか？

回答

可能性は十分にある。中央図書館も老朽化してきている。現在、延床面積も含めて市民ニーズに合った図書館が十分に整備できていない。現状の延床面積でできることも限られるので、市民意識調査とPOP-UP LIBRARY、サードプレイスの取組の検証結果を踏まえて、新しい図書館構想を来年度以降に策定することを考えている。そのなかで、大きい図書館を整備することが入っていく可能性は十分にある。

意見

大きな図書館も嬉しいが、20館が歩いていける範囲にあり本に詳しい司書に出会えるといことは本当に強みと思う。図書館は生涯学習の施設であり、図書館は人が生まれてから亡くなるまで社会教育機関としての役割がある。中高生にたくさん来てもらうことは今の京都市図書館のサイズでは無理だと思う。なので、学校教育のほうで学校図書館をもっと充実させることも大事。私はなぜ図書館が自習場所として必要なのかよくわからない。図書館は学生の自習のためでなく、その本を読んだり借りたり、イベントに参加したり、企画に参加したり、そういう学びの場ではないだろうか。子育て中のお母さんも学びたいと思っている。読み聞かせをすると、赤ちゃんもお母さんも生き生きとする。そこで出会いが生まれるし、図書館ボランティア同士の交流や学び合いもある。今まで障害がなかった人も障害を抱えることもある。様々な人々がいるなかで、こんなサービスができますよ、ということを考えて頂ければと思う。もし、スペースがもっとある大きい図書館ができるならば、設計のはじめから自習スペースも設けることができるだろう。

意見

図書館マップを見て、たくさんの図書館があるが、自分自身はなかなか活用できていないなど感じた。京都市図書館をはじめ多くの種類の図書館カードがある。1枚のカードに統一できたり、電子にできれば便利だと思う。さらにいえば、貸出実績とか表示されたら達成感に繋がって良いと思う。

意見

図書館はたくさんあるが、小学生は学区から一人では出られないという意味では、学区内に公共図書館がない地域があるということはひとつの課題と思う。

意見

学校図書館が充実しないといけない。

意見

カードを1枚に、ということは図書館の守秘義務の問題や利用履歴の問題とかいろいろな問題が関わらと思うがそこがクリアできれば。

回答

京都市図書館のカードはスマホで表示できる。あまり知られていないかもしれないが。もっとアプリ

ールしないといけない。

意見

私はスマホ表示を利用している。とても便利。

回答

個人情報のこともあり、カードを1枚に統一ということは今すぐには即答できないが、一つのアイデアとして賜りたい。

● 海外事例紹介

カザフスタン及びオランダの事例についてスライドを用いて紹介。

● 最後に

意見

日本の図書館が優れていると思うことのひとつが、こども向けの出版物が豊富であること。こども達にもっと図書館に来てもらって、学んだり、悩んだり、新しい自分の進路を見つけたりするためには何ができるのか、ということが大切。勿論、20代以上の人達にも図書館に来てもらいたい。そのために何が必要なのか、最後に皆さんからアイデアを頂けたら。

説明

次回の図書館協議会では、市民意識調査のデータや3館での POP-UP LIBRARY の取組結果を分析したものを、課題と解決策を繋げたかたちで皆様に提示し、どのような図書館、どのようなサービスが必要なのかについて、ご意見を頂ければと考えている。

ひとつめの議題で他の委員から話があったが「生活のなかに図書館」という話と、左京図書館でアンケートをとるなかで、資料を探して専門的に図書館を活用したい方もいれば、そうではなく、図書館にゆったり滞在したい方も、これから新しい利用者層を拡大していくと増えてくると思う。そういった声を積み重ねながら、図書館が本を読んだり借りたりするだけでなく、滞在してゆっくり過ごしたり、親子がくつろいだりとかできるような環境になっていくことができるかどうか、データで積み上げたいと考えているので、ご意見をお願いしたい。

意見

やっぱり、どんな場所でも、行って「歓迎されていない」と感じてしまうと萎縮して行かなくなる。「来るな」と言われるわけでもなく雰囲気なども含めて。心のなかに弊害とかができないように。歓迎されるようなかたちで。自分たちが「やりたいな」と思うものが並べられていて、自分たちも使っているんだな、という風に思えたら。人間は生きていくうえで繊細さを失っていくが特に青少年はその辺りが難しいと思う。思春期でいろいろな感情をこれから積み上げていく世代だと思うので。まず、自習室がないといった時点で、青少年にとって図書館は自分たちは使えない、使わせてもらえない施設になってしまう。自分たちも使っているんだと思えるような空間づくりが、青少年のこれからの利用を伸ばしていくためには必要ではないか。

意見

中高生には探求型学習を推奨している。探求型学習に対応できるような雰囲気も大事。学校の先生が、図書館に行って課題をやっておいでと言いやすくなるような。学校の図書館ではその部分ではなかなか対応できないと思う。

意見

公共図書館を探求型学習に活用すればいいということだが、図書館側からよく聞くのは、学校が研究テーマを公共図書館で調べてくるように指示を出す一方、図書館側は研究のテーマを教えてもらっていないので、次々と同じテーマを調べる生徒がやってきて資料が足りなくなるなど課題もあると聞く。やるのであれば学校と図書館がきっちり連携する必要がある。

意見

ハード面はやはり意見がやすいと思う。ただ、ハードは作った瞬間から古くなっていく。なので、そのうち対応できなくなっていく。一方でソフト面であったり、可能性があるのは、司書だと思う。司書の働きは本を管理することが一般的なイメージだが、それだけではこれからの世の中では十分でなく、探求型学習を支える担い手にもならないといけないし、子どもだけでなく大人の学びも支える人材にならないといけないと思う。そうなってくると、本を管理するだけのイメージから、とんでもなく突き抜けた面白い司書さんがいるぞ、あの人に会うために図書館に行く、というようなところまで高めることができれば最強なんだろうと思う。そういうところに、ハード面も合わせて考えていかないといけないと思う。

意見

司書の専門性は大事なので、同時に待遇面も改善できれば。やはり待遇が上がらないと専門性を向上させることはできない。一人の司書が全ての分野をカバーできるものではないので、それぞれ専門性を持った特色のある司書がいればいいと思う。

意見

司書の仕事は一般にはなかなか知られていない。特に今はAIが普及してきて、サポートという意味ではAIでほとんどカバーできるイメージを持たれがちだが、そうではないという点を示すため、司書の力、司書の経験や可能性をアピールする機会がもっとあればいいと思う。また、図書館というのは、地域の民主主義を育てる、支える、という役割ももっと重視されてもいい。そういう部分で何ができるのか、という点まで含めて司書の仕事の幅広さや奥深さを知る機会があればよい。

閉会の挨拶

いろいろなご意見、ありがとうございます。

今、お話しになったのは、市として、便益に優れ、快適で有益な図書館をつくらうということ。それは限りなく「力」を必要とするため、有益性を求める程、労働力を期待するという機能的な矛盾に陥ることになる。前近代的なものとして、カウンターが人力であることが挙げられ、これは限りなく人力から遠ざかり機械化していくという時代の流れに真っ向から反対することになる。それを我々はどうのように克服していくのかが大きな課題である。最も悩ましいのは、人力に頼っているカウンター

業務は、非近代的で人間の善意に頼っている。私は、どれぐらい全てのものを機械化できるのか、機械化できるものは機械化しようじゃないか、機械化により余力を生み出せば、それをもっとサービスに向けることができると考える。本はすべて記号化・暗号化されているので何の判断等もなく処理が可能であるため、カウンター業務はすべて機械化してしまい、それで得られた余力、人間力を、要求されているサービスに向けるということを考えていかなければならない。レファレンス業務というのは拡大しており、その有効性が認識されているので、そちらの方に人力を向ける。司書たちの知の力、洞察力、人間性といった能力をその場で発揮する。そのためにも現状を変えていかないといけない。委員の皆様におかれては、これを図書館の大きな課題として考えて頂いて、是非とも良いご意見をいただきたい。

本日は本当に、ありがとうございました。